

明治学院大学フランス文学専攻 紀要

第1号～第12号（2002年～2013年）は *Cabaret Voltaire*、第13号以降（2014年～）は『明治学院大学フランス文学専攻紀要』のタイトルで刊行。

掲載号	発行年	著者名	論文タイトル	掲載ページ
【第23号】	2024年	今野 建	『夜の果てへの旅』における「パロール」と登場人物の行動との関係性 —セリヌ作品における登場人物の台詞の役割についての一考察—	p.1～33
【第22号】	2023年	今野 建	アンドレ・ジッドのアンガージュマンとナチズムへの時代	p.1～40
【第21号】	2022年	藤井 惇史	デュマ・フィス『金銭の問題』における投機と結婚 —オージェ『厚かましい人たち』とその比較を通して—	p.1～19
【第20号】	2021年	藤本 和	マラルメ「懲罰された道化」（決定稿）注解の試み	p.1～23
		藤井 惇史	デュマ・フィス『私生児』における家庭の問題	P.25～41
		会田 久美	Des pièces enflammées de « Shakespeare » aux mains de Berlioz et de Dumas	p.43～68
【第19号】	2020年	藤井 淳志	デュマ・フィス『ドゥミ・モンド』 — 墮落した女たちの社会 —	p.1～12
		永井 友梨	James Ensor et le japonisme : l'ignorance ou la réticence ?	p.13～52
		会田 久美	Les images shakespeariennes dans l'opéra goethéen —Berlioz, Thomas et Gounod—	p.53～63
【第18号】	2019年	会田 久美	アンブロワーズ・トマ オペラ《ハムレット》 —シェイクスピア作品の解釈と再編成—	p.1～26
		永井 友梨	ジェームズ・アンソールにおける日本美術からの影響	p.27～60
		藤井 惇史	第二帝政期演劇における結婚の主題 —ラビッシュとデュマ・フィス—	p.61～76
		渡辺 怜	モネと現代アートを考える —モネ それからの100年展考察—	p.77～94
		会田 久美	フランスにおけるシェイクスピア劇の模倣と昇華 —18世紀から第二帝政期まで—	p.1～20

【第17号】	2018年	近田 航平	研究ノート ・真理と理性についての覚書 —『純粹理性批判』におけるコペルニクスの転回をめぐって— ・『異常者たち』講義における自慰撲滅運動とキリスト教の告解制度についての覚書	p.21~32
		藤井 惇史	デュマ・フィス『椿姫』 —ヒロイン像と戯曲上演の道程—	p.33~51
【第16号】	2017年	会田 久美	オペラ《ロミオとジュリエット》 フランスにおける上演を通して —ダレラックからグノーまで—	p.1~26
		近田 航平	研究ノート —『間接的言語と沈黙の声』に関する覚書—	p.27~43
【第15号】	2016年	会田 久美	フランス音楽、フランスオペラにおけるシェイクスピア受容 《幻想交響曲》から《ベアトリスとベネディクト》まで	p.1~22
		勝山 絵深	沈黙のインク ルネ・シャルの『イプノスの綴り』における断章性	p.23~42
		近田 航平	言語の現象学とは何か —中期言語論における存在への問いかけ—	p.43~64
		永井 友梨	アンソールにおける色彩と平面性 —ゴッホとの比較と、マティスまでの流れのなかで—	p.65~98
		堀 美佳	テオフィル・ゴーティエの女性観	p.99~122
		堀口 麗	ふたつのニキ・ド・サンファル回顧展に際して —展覧会評—	p.123~157
【第14号】	2015年	会田 久美	オペラ史における『アエネーイス』 ベルリオーズ《トロイアの人々》を中心に	p.1~20
		堀口 麗	アジュールとしての《HON》 —ニキ・ド・サンファルの女性表象から—	p.21~40
		永井 友梨	「仮面の画家」となるまで	p.41~60
		前野 恵理子	終わり続ける物語 —『勝負の終わり』をめぐる罰と堆積について—	p.61~76

【第13号】	2014年	会田 久美	ベルリオーズ『回想録』 —理想のヒロインをもとめて—	p.1~18
		勝山 絵深	共同の存在 初期作品『兵器庫』、『アルティース』、 『ムーラン・ブルミエ』の比較と考察	p.19~44
		堀口 麗	ニキ・ド・サンファルの初期作品群における人体像の変容 —射撃からアサンブラージュ—	p.45~78
【第12号】	2013年	勝山 絵深	同じ基軸の上で	p.1~22
		高田 志保	Est-ce que le temps chez Proust est bergsonien ou non bergsonien ? : les interprétations des chercheurs	p.23~44
		永井 友梨	オステンドの異端児、アンソール ~光からの出発~	p.45~72
		中村 英俊	Le microscope et l'esprit scientifique des Lumières	p.73~99
【第11号】	2012年	勝山 絵深	届かぬものへの距離 —アルベルト・ジャコメッティとルネ・シャール—	p.1~26
		高田 志保	Les trois temps et la métaphore proustienne dans la scène de la promenade à Combray	p.27~54
		安川 孝	Le système axiologique du roman de la victime	p.55~88
【第10号】	2011年	藤山 真	フーコーとハーバマス —モダンかポストモダンか—	p.1~20
		安川 孝	Etude programmatique : la « fabrique » de son lecteur par le « roman de la victime » sous la III ^{ème} République	p.21~42
		高田 志保	Processus et fragmentation : la genèse des deux côtés à Combray	p.43~66
		中村 英俊	L'art de décrire en histoire naturelle au XVIII ^e siècle	p.67~90
		田中 龍	空間と時間のゆらめき —『ひとつの町のかたち』における語り手とは—	p.1~16

【第9号】	2010年	山下 陽子	錬金術考察・概略	p.17~30
		鈴木 智子	ケベック児童文学における「歴史物語」の変遷	p.31~52
		八木 真理子	《本》と新聞—マラルメにおける印刷出版—	p.53~70
		安川 孝	Pour une histoire de la lecture de « roman de la victime » à la Belle Époque -Essai de la mise en œuvre de l'approche de l'histoire des pratiques de lecteur	p.71~94
		高田 志保	La fin estompée : réflexion sur le style de Proust dans la scène de la fin de la promenade à Combray	p.95~116
		中村 英俊	L'imagination et l'histoire naturelle au XVIII ^e siècle : le cas Buffon	p.117~142
【第8号】	2009年	小野 太郎	ジュネのまなざし—変化と孤身—	p.1~14
		藤山 真	フーコーと「啓蒙」— 統治と現在性に着目して —	p.15~30
		齋藤 弘崇	精神分析による「金融危機」 —ジャック=アラン・ミレールへのインタビューを通して—	p.31~48
		山下 陽子	『化学の結婚』における錬金術	p.49~60
		田中 瞳	ジュリアン・グラックの『ひとつ町のかたち』の私解	p.61~74
		安川 孝	19世紀末における表象に関する研究補考 —犠牲者小説の場合—	p.75~90
		塩谷 祐人	苦痛のエクリチュール —アゴタ・クリストフにみる手法としてのマゾヒズムの考察	p.91~112
中村 英俊	Efféminer Mercure -une lecture de frontispice de <i>La Philosophie dans le boudoir</i>	p.113~132		
【第7号】	2008年	加藤 春奈	ジュール・ヴェルヌ『海底二万里』における空間の在り方 —<ノーチラス>号と海底世界—	p.1~16
		鈴木 智子	『マンフーカルカジュール』における二つの世界	p.17~36
		安川 孝	新聞小説『パンの配達女』と大衆 —19世紀小説における民衆による読書に関する試論—	p.37~58
		八木 真理子	夢想された言語 —マラルメの『英単語』について—	p.59~76

		高田 志保	研究ノート「ブルーストにおける小説の階調」	p.77-92
		塩谷 祐人	領域を脱する小説 —アンドレイ・マキース『フランスの遺言』とミラン・クンデ ラ『無知』を巡って—	p.93-114
		中村 英俊	ラマルクとルソー(1)	p.115-133
【第6号】	2007年	金森 謙輔	ベルクソンから見るテレパシーの可能性とその研究	p.1-10
		小林 麻実	メランコリーを旅しながら —デュラーからゴッホに至るまで—	p.11-26
		石川 由香里	ペローの「眠り姫」	p.27-42
		室伏 茜	詩が生まれるとき —アンリ・ミショーの詩について—	p.43-58
		高田 志保	ブルーストの散歩(2)	p.59-84
		八木 真理子	マラルメの『最新流行』 —詩人の描き出す現在—	p.85-108
		安川 孝	リモージュの精肉業者、トルコ街の百年 —近代化の波に吞まれた 「中世の真珠(Perle du Moyen Âge)」—	p.109-133
【第5号】	2006年	石川 綾子	アルベール・ロビダ『二十世紀』 —パリ大改造における視線の変化—	p.1-22
		藤田 智子	ケベック児童文学『王の娘、ジャンヌ』 —ジャンヌの生きる場所—	p.23-36
		八木 真理子	マラルメの部屋	p.37-54
		塩谷 祐人	遠く祖国へと続く門 —エクトール・ピアンキオッティ『夜が昼に語ること』を巡っ て—	p.55-84
		高田 志保	ブルーストの散歩(1)	p.85-106
		中村 英俊	数字と身体の劇場—サドの手紙と作品—	p.107-128
【第4号】	2005年	安川 孝	研究ノート 「ブノワ・ロマンと第一インターナショナル」	p.1-22
		塩谷 祐人	クンデラ、その揺れ動くノスタルジー	p.23-58
		高田 志保	マルセル・ブルーストの詩的時間について	p.59-80
		中村 英俊	La vue et l'imagination chez Sade	p.81-100

【第3号】	2004年	安川 孝	要約<Socialisme Intégral>序章～第三章	p.1~34
		渡辺 麻美	スペクタクルとしてのダダについての一考察	p.35~42
		御園 滋樹	加速と連続 『ダランベールの夢』における齟齬について	p.43~78
		高田 志保	ブルーストの喪失感とその役割	p.79~99
【第2号】	2003年	塩谷 祐人	辿りつくことのない大いなる帰還 ミラン・クンデラ『無効』にみる亡命作家の姿	p.1~20
		高田 志保	ミシェル・レリスの告白 『成熟の年齢』を巡って	p.21~34
		八木 真理子	マラルメと探偵小説	p.35~44
		木村 帆乃	昔々あるところに…おとぎばなし<翻訳>	p.45~112
		中村 英俊	Lamarck et sa notion de la « nature »	p.113~160
【第1号】	2002年	中村 英俊	サド的リベルタン、あるいは新たなるnature	p.1~12
		御園 滋樹	デイドロ『お喋りな宝石』補遺3篇(1798)における 人間=操り人形という命題について	p.13~28
		中村英俊・田中 文	『気のふれた女たち』全訳とその解説	p.29~72
		田中 文	『気のふれた女たち』解説にかえて (アンドレ・ブルトンと演劇)	p.73~82
		木村 帆乃	子どもの脳―堀内誠一の幼少期―	p.83~121